

賀潜
六字の遺書

講談社

六字の遺書

定価 三六〇円

第一刷発行 昭和四十四年九月十六日

著者 佐賀 潜

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一

郵便番号 一一二

電話東京(九四二) 一一一一

振替東京三九三〇



印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 有限会社光和製本

© 佐賀 潜 1969 乱丁本、落丁本はお取替えいたします。

目次

六字の遺書

7

影絵の男

55

底無しの沼

111

課長の自殺

165

女体の幻影

209

装幀
佐藤光孝

六字の遺書

六字の遺書

八月三十一日――。

一

丸茂商事株式会社は、七百三十万円の手形の決済ができず倒産した。会社は、東京都千代田区多町、国電神田駅の西側の大通りに面したところにあり、附近はいわゆる問屋街で、大小さまざまな問屋が、軒をならべている。

丸茂の店は、モルタル塗の二階建だが、間口が八間、奥行十間もあって、盛業時には、店内に洋服生地があふれ、これを買いくる洋服屋が朝から夕方までひっきりなしに、出入りしていた。

資本金は三千万円。年商十億円で、業界でもトップクラスの問屋だった。ところが、利益の幅が少ないのと、貸し倒れのため、七、八年前から、メーカーへの支払いもおくれ勝ちとなり、遂に倒産するにいたったと噂が立った。

支払い手形が不渡りとなると、債権者が店へ殺到し、「詐欺だ」「告訴するぞ」「社長を出せ」と大声でわめいた。が、社長の丸山茂吉は、不渡りを出す、行方をくらましてしまった。

丸山の一人息子で会社の専務をしている伸介と常務の高田清市が、債権者に応対し、止むなく不渡りを出した事情を説明した。債権者側は、社長不在は不誠意の現われだ——と主張し、社屋を占拠し、帳簿類、印鑑を押えてしまった。

この時点における丸茂商事のバランスシートは、負債総額が三億五千万円に対し、売掛金が七千五百万円、社屋の土地建物の価額が、三千五百万円、在庫商品が二千万円、合計一億三千万円。差引二億二千万円が、債務超過となっている。

伸介は、父の行方を探した。

文京区小石川の斎藤理恵、新宿区四谷の立野良江の二人に、何回も電話を入れたが、「社長は、不渡りを出した日から、一度もお見えになりません」といわれた。

理恵は二号で、良江は三号である。社長のアジトといわれている淡路町の三笠ビルの四階の四十八号室へ電話を入れたが、応答はなかった。応答がない——ということは、誰もいないことになる。三笠ビルの部屋は、社長の秘密室で、会社でも知っているのは、伸介と高田常務と、経理課長の上原博二しかない。

ビルといってもマンションで、八畳の洋室と、六畳のベッドルーム、キッチンとバストイレがついている。社長が、この部屋を借りたのは、七年前だ。その頃、現在と同じように、金繰りがわるくな

六字の遺書

り、不渡り寸前に追いまれたとき、社長は、隠れ場所としてこの部屋を借りた。幸い、その時は、メーカーであるグリーンテックスが、丸茂をバックアップして、手形を買戻してくれたので、倒産をまぬがれた。それ以来、社長は三笠ビルの四階の部屋を、〃別室〃と称して借りていたのである。

「社長は、別室に潜^{ひそ}んでいるんじゃないですか。四谷にも、久堅^{ひしかた}町にもいないとすれば、別室にちがいありませんよ」

と、高田常務が、伸介に言った。

債権者集会がすんで、三人の委員が選ばれ、会社財産を管理することがきまった。伸介は、高田と二人で、専務室のソファに向き合い、今後の見透しについて話し合った後で、高田が、思い出したように、別室――を口にしたのだ。

「電話をかけたがいらないんだ」

「社長は、どういうお心算^{つもり}なんですかね。不渡りを出したら、まず、社長が債権者の皆さんに頭を下げるのが順当だと思ふんですか」

高田の顔には、明らかに社長に対する不満の色が浮んでいる。彼は、丸茂が、個人経営の頃から、小僧として雇われ、現在まで三十一年間勤続し、株式会社になると同時に、常務取締役となり、営業を担当している。年は四十六だが、二枚目張りの美男子で、一見すると三十五、六にしか見えない。「親父は、それができないんだよ。不渡りを出したひけ目があるんで、顔が出せないんじゃないだらうか」

「まさか、専務は、知ってて社長を隠してるんじゃないでしょうね」

高田の眼に、異様な光がみなぎった。黒縁の眼鏡の奥で、冷たい眼が伸介を睨んでいる。

「冗談いっちゃ困るな。僕だって、親父を探しまわっているんだ。これから先のこともあるからな」

「先のことは、心配ないんじゃないやありませんか。社長は、かなりまとまった金を持っていますよ」

「なんだって……そんな金があれば、不渡りを出す必要はないじゃないか」

「専務は、まだお若い。社長は、今日あるを予測し、着々、準備してたと思いますよ。四谷も久堅町も、ご存じのはずです」

伸介は、腕を組むと息を殺した。三日前の午後二時、七百三十万円の金ができず、経理課長の上原博二が、金策に疲れ果てて帰ってきた時のことを思い出した。

上原が、「社長、だめです。どこも貸してくれるところはありません」といった。社長は、黙って頷いてから、「とうとうお手あげか」と、力のない声を吐き出した。その声が、伸介の腹に沁みこんだ。五十九歳になったばかりの父親の風貌が、ひどく老いこんで見え、見るからに、人生のたたかいに敗れ、打ちひしがれた姿を正視できなかったのだ。

「親父は、金などあるはずがないよ。あれば、手形の決済をつけたはずだ」

高田の頬に薄笑いが浮んだ。艶のいい肉附のふくらした頬がゆるむのを眺め、伸介は、何かぞっとするような無気味さを感じた。

そのとき、あわただしく上原経理課長が入ってきた。上原は、伸介の前で頭を下げると、「債権者

委員の方が、帳簿を調べていますが、三千万円ばかり、行方不明の金がある——といっています。どうしたものでしょう？」と、硬^ニわばった声で報告した。

「三千万……そりゃ大金だ。知らんのか、君は……」

伸介は、言葉を吃^{ども}らせた。

「多少のことは知ってますが」

「ということは、親父が、ごまかしてるというのか」

「社長さんが、ご自分で取引した分がありまして……ほんとのこというと、私も、その数字はよく判りませんのです」

上原は、何かおびえるような口のきき方をした。細長い顔だ。色が黒く、いく分出歯で、いつも風邪をひいているような、しゃがれた声を出す。商業高校を出て勤続十五年、経理専門に働いてきた男だ。

高田が、口を入れた。

「社長の簿外取引は、いつ頃からあるんだね。しかも売りだけの……」

「私の知ってるのは、七、八年前からです」

「売りだけを簿外にして、代金を社長がそっくり、ふところへ入れていたんだね」

「多分、そうだったと……」

「簿外分の仕入分は、会社で払っていたんだね」

「仕入は、メーカー別に、一括請求をうけますから、そういうことになります」

「債権者委員の人は、なぜ、不審を持ったんだね」

「メーカー別の仕入と売上げが一致しないからです」

「総額を、はじき出したんだろうか」

「なんでも、一億五、六千万円あるとか申しております。なんと返事したらよろしいんでしょうか」

「仮に、七年間で一億五千万円とすれば、一年当り二千万円強、月々百七、八十万円前後の金……それくらいの金は、機密費交際費として、社長が使っていたんじゃないか——と答えておき給え」

高田の語尾に力がこもった。上原は、伸介の眼をちらりと見てから、部屋を出て行った。高田が、タバコをくわえ、ライターの火を移した。深々と吸い込み、煙を天井へ吐きだした。

伸介は、二人の問答を聞いて、意外な思いがした。親父が、毎年二千万円以上の金を、ふところに入れたとすれば、会社をつぶす腹ではなかったのか。問屋の利幅は少い。年商十億円の商買をしているのに、利益は五千万円に満たなかった。社長以下三十人の社員の人件費が、年間三千万円かかり、手形の割引料、銀行へ利息払い、その他の経費を入れると、年々、二千万円近い赤字がつづいていた。赤字は、メーカーへの支払いを引延すことによってやりくりしてきた。だから、親父がごまかした金が、正當に入金されていれば、赤字を出さずに経営ができたことになる。親父は、会社を喰いつぶす心算があったのだろうか——。

「専務さん、社長は、一億五千万円の現ナマを持って、ずらかったんでしょいかね」

高田の言葉に、冷たい皮肉がこめられているようだ。

「信じられないことだ。七年前といえば、グリーンテックスに助けられた年だ。僕は、大学を出たばかりで、何も判らなかつたが、少くとも親父は、ひどく感謝していた。これでお前のために残す会社を守れた——といってね。その親父が、自分で会社をつぶすはずがないと思うんだが」

伸介は、自分にいい聞かせるように、語尾に力をこめた。

二

伸介は、午後四時を過ぎると会社を出た。債権者たちが、丸茂の社員を、まるで罪人扱いにし、我物顔で社内をのし歩き、伸介に対し、疑いの眼を向けるのを眺めているだけで、怒鳴りたくなるような衝動にかられた。

へ法律的には、借りがあるだけで、会社は彼等のものじゃない。会社は、親父のものだ。つまり、俺のものだ。商人の貸借は、犯罪じゃない。馬鹿にしゃがってゝと思うと、専務室に坐っているのが堪えられなくなった。

彼は、小型乗用車を自分で運転し、三笠ビルへ向つた。ひょっとしたら父がいるかもしれない——との期待があつた。ビルの脇に車を止め、エレベーターで四階へ上つた。四十八号室のドアには、なんの表示も書いていない。ノブをまわしたが、鍵がかかつていた。彼は、合鍵を使ってドアを開け

た。

中は、西陽が当り、むっとするような熱気がこもっていた。八畳の洋間に古びたソファがある。鍵のかかるロッカーが一本、机と椅子。よごれの見えるシックイ壁には、大きな電気時計がかけてある。隣りが寝室、セミダブルのベッドと、洋服ダンスの外は何もない。キッチンをのぞく。古風な流し台とガスレンジと、冷蔵庫、サイドボードが置いてある。風呂場を開けた。幾日も、使用した形跡はない。

伸介は、洋間へ戻ると、ロッカーを開けようとした。鍵がかけてあった。彼は、父の面影を頭にえがいた。へこのアジトで七年間、親父は、何をしていたのだろうか？ 経理課長の言ったように、一億数千万円の隠し金が本当なら、親父は、この部屋で、金を数え、簿外取引の計画を立て、誰にも知られず貯蓄をしていたことになる。そんなことを考えたとき、ふと、父をめぐる女たちの顔が浮んできた。

丸山茂吉の道楽は、“女”だった。息子の伸介の眼から見ても、眉をひそめるほどの女好きで、絶えず女を追いかけていた。伸介を生んだ妻は、二十年も前に死亡し、半年もたたぬうちに後妻を貰った。定子という二十一歳になる会社の女子社員だった。当時、丸山茂吉は三十九歳だったから、十八歳の年齢差があるわけだ。

定子は、気の強い女で、丸山は、いわゆる女房の尻に敷かれる亭主となってしまうた。が、夫婦仲は、必ずしもうまく行っていない様子だった。